The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Martin O'Brien, A Crisis of Waste? : Understanding the Rubbish Society, Routledge(New York), [2008] 2011
Author(s)	梅川, 由紀
Citation	年報人間科学. 2020, 41, p. 67-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Martin O'Brien
A Crisis of Waste?: Understanding the Rubbish Society
Routledge (New York), [2008]2011

梅川 由紀

“A Crisis of Waste?: Understanding the Rubbish Society（ごみの危機？――ごみ社会を理解すること）”はマーティン・オブライエンによる著書である。本書は、これまでネガティブに語られることの多かったごみを、ポジティブな観点から社会学的に捉え直した著書である。これまでの日本の環境社会学やごみをめぐる主要な議論とは異なる、大変挑戦的な試みといえるだろう。本稿では本書の内容を紹介し、その後に本書の貢献と限界について検討したい。

本書は大きく四つのパートに分かれている。オブライエンによれば、第一〜三章はごみに関する記述的な部分であり、第四〜五章で分析が行われ、第六〜七章で理論的検討が行われている。そしてイントロダクションと結論の章で、オブライエンの提案する「ごみ社会（rubbish society）」の概念が提示されている。章別に要点をまとめると以下の通りである。

イントロダクションでは、オブライエンが「ごみ」をどのように捉えているかが提示されている。私たちはごみといえば、耐用年数の過ぎたものや価値がなくなったものをイメージしがちである。しかしオブライエンは、一般的にごみと分類されているものは、多くの価値や性質を持つと述べ、その詳細を以降の章で説明することが示唆される。さらに、現代社会を生きる私たちはキッチン、居住空間、車、町、私たち自身の歯に至るまで、輝くような綺麗さを求め、ごみのない状態を求めてきた。このようなごみを排除する感性は、ごみが表していることや支えていることから、イデオロギー的保護として身にまとう「マント（a cloak）」のようなものだと主張した。そして本書を通して、今日の世界の先進国は「消費社会（consumer society）」ではなく「ごみ社会（rubbish society）」として解釈されるべき理由を論じることが示される。

第一章では、中世から20世紀初頭までのごみの歴史について、イギリスを中心にまとめられている。不潔なもの（排泄物・悪臭・ごみなど）がどのように扱われてきたか、不潔なものに対する改革・政治はどのように進められてきたか、消費社会はどのように登場したのか、という観点から整理されている。歴史を通してオブライエンは、人々が「器用仕事をする人（bricoleur）」から「消費者（consumer）」へと変化している様子を指摘する。すなわち、自らモノを作り、修理を行い、わずかなごみしか生み出さなかった人々が、潜在的に価値のある資源を捨てる人間へと変化する様子である。それは一見すると、リサイクル社会から廃棄社会への変化にもみえるが、オブライエンはそれを否定する。確かに家庭の中のモノの量は増え、モノと人の関係は変化した。その一方で、産業や技術の革新を通して、新しい形の資源回収が出

現していることを主張し、「器用仕事をする人」から「消費者」への変化と、「使い捨て社会（throwaway society）」との直接的な関連は弱いことを強調した。

第二章では、四つの文学作品における、ごみの描かれ方を考察している。四つの作品とはすなわち、チャールズ・ディケンズの『互いの友（Our Mutual Friend）』、T・S・エリオットの『荒野（The Waste Land）』、フィリップ・K・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？（Do Androids Dream of Electric Sheep?）』、ドン・デリーロの『アンダーワールド（Underworld）』である。オブライエンはこれらの作品から、「生命の基本的な基盤」「生命の価値の喪失・欠乏」「生命への脅威」「避けられない影」としてのごみの姿を分析した。そしてこのようなごみの様々な側面を「ごみの文化的想像力（the cultural imagination of waste）」という言葉で表現した。

第三章では、無駄あるいは危険と捉えられてきたごみから、様々な産業が生み出されてきた様子を歴史的に考察している。それは大きく三つの時代に分けられる。第一の時代は19世紀後半までを指し、ごみが産業を発展させる様子がうかがえる。例えばボロ（rag）は、木材パルプが登場するまで紙の主原料であり、ボロによって製紙産業は発展した様子を確認できる。第二の時代は19世紀後半から第一次世界大戦までで、この時「ごみ革命（rubbish revolution）」が起こったと指摘する。例えば、当時石油はパラフィン精製時に発生する危険な副産物とみなされてきた。ところが石油を用いたエンジンが発明されると、パラフィン精製の副産物にすぎなかった石油が、一つの産業へと変化した。このように、ごみが産業革新の原因となり、ごみと原料の関係に大変動を引き起こすようになった。第三の時代は消費社会の誕生である。過剰な生産・消費などは個人・社会システムに負担をかけ、ごみは生命を脅かす危機とみなされ、人々に「ごみの危機（crisis of waste）」という感覚をもたらした。ところがオブライエンによれば、こうした傾向は新しい動きではない。例えばローマ帝国時代から、鉛・ヒ素・その他有害な物質が環境に堆積されてきた。むしろ重要なことは、こうしてごみに注意を払うことで危険を克服する力や、技術・産業・社会再編を促進する力を生み出している点にあると主張する。例えば、いわゆる「宇宙ごみ」も、宇宙ごみが衛星に衝突しないように「追跡」する企業が誕生した。そして技術の洗練とともに、宇宙ごみの追跡にとどまらず、それを「捕獲」する技術へと発展した様子を指摘する。

私たちは一般的に、現代社会は使い捨て文化の浸透により「ごみの危機」に直面していると信じている。第四章では、この一般常識を覆す試みがなされる。現代社会は戦前の生活と比べて、より多くのごみを生み出しているわけではないことを、1919年から2003年のイギリスの家庭ごみのデータをもとに証明している。確かに先行研究や、そこで扱われる統計データ上では、現代に近づくにつれてごみの量は増えているようにみえる。ところがこうしたデータは、様々な配慮のもと読み解く必要があるという。例えば、調査によって「ごみ」の定義に違いがあることに注意しなければならない。同じ時代のごみの量でも、家庭ごみに「庭のごみ」を含めるか否かで数値が異なるため、配慮が必要である。あるいは、「かつては野菜屑の量が少なかった」というデータについては、そもそもどのくらいの量の野菜が家庭内に持ち込まれていたのかが分からなければ、廃棄率が高いのか低いのか判断できないことを指摘する。単に野菜屑の量が少ないだけで、以前はモノを大切にしていたとは断言できない。このような詳細な検討を踏まえ、少なくともイギ

リスにおいては第二次世界大戦以降、異常に浪費的な時代（an anomalously wasteful era）が生じたという考えは疑わしいと結論付ける。

五章では消費社会を特徴づける、ごみの多様な側面が提示される。大きく二つの文脈から検討がなされている。はじめに「個人的・家庭的・共同体的文脈」からは、ごみに個人的な想い出や物語が堆積すること、ごみが美化されたり精神化されたりすること、有用性や価値を再活性化するための行為がなされること、使用可能・交換可能なものにするための技巧が存在することが提示される。例えば、ニッキー・グレッグソンらの研究（2007）を援用し、所有者にとって重要な意味を持っていたり、使用価値が残っているモノは、例え不要になってもごみとして処分されるのではなく、人に譲ったりチャリティーショップに持参される場合があることを紹介した。ごみと人間の間に存在する、親密で複雑な関係が提示された。次に「制度的・商業的な文脈」では、アルジュン・アパデュライの議論を援用し（1986）、オブライエン自身が過去に行った調査の結果を用いながら、ごみ発電の事例について検討する。ごみを燃料として発電を行うごみ発電では、ごみは「商品」として理解される。このように現代社会におけるごみは、文脈に応じて様々な側面を持つ様子が紹介される。

第六章ではメアリ・ダグラスの『汚穢と禁忌』の議論を取り上げ、ダグラスの議論を現代のごみに援用することの困難性について論じている。ダグラスの文献はもはや古典として、ごみを論じる研究者たちがこぞって引用する重要文献である。しかしながら、その理論的・分析的な文脈はいつも無視されてきたと述べ、詳細な検討を行う。結論としてオブライエンは、ダグラスの議論は未開社会という特殊な世界観において成立するものであり、現代社会の分析には援用できないことを指摘する。そして、ダグラス以降のごみの研究者たちはどのようにダグラスの議論の限界を乗り越えているのか、先行研究の整理を行っている。

第七章ではごみの理論を発展させる試みとして、ごみを社会的・経済的関係に結び付けて議論している。はじめにカール・マルクスのごみに関連する議論に着目する。マルクス自身は、ごみに関する体系的な議論を展開してはいないが、彼の著作を横断的に概観し、ごみに関連する主題を三つ抽出している。すなわち「ルンペンプロレタリアート」「過剰生産」「生産の排出物の再転換」である。ルンペンプロレタリアートは「社会的崩壊と階級闘争の理論の結果」として出現すること、過剰生産は「無秩序な産業組織と生産の社会的必要性からの切断」によって出現すること、生産の排出物は、「製造のための資源、または新しい技術的解決策の適用を待つ非効率性」によって出現することを示した（本書P.176-177）。そしてこれらの概念がその後の研究者にどのように影響を与えているのか、先行研究の整理を行っている。

結論の章では、現代社会が「ごみの危機」に直面しているという考え方は広く一般に根付いているが、消費主義がごみの危機の先駆けであるという考えは疑わしいことを再度確認する。これまで検討してきた通り、ごみは無益で無価値で避けられない存在であるだけではなく、同時に驚くべき技術的・経済的・社会的変化をもたらすものである。ごみを生み出すことは、「複雑な社会プロセスに従事」することであり、「多様なネットワークや組織を通して、欲求、精神性、美しさ、同様に利益、資源、商品を明らかにすること」である（本書P.178-179）。「私たちが、生活の完全に中心的な部分は、ごみを生み出すプロセス（the process of wasting）であることに気づいた時、そしてその時だけ私たちは現代のごみの本質的な豊かさ、

多様性、豊富さと共に、合理的・集合的に望ましい何かをし、それが何であるかを評価できるかもしれない」と指摘する（本書P.179）。ごみを非難するのではなく、ごみと社会のつながりを認識する。私たちが食べるモノや消費するモノに着目する消費社会としてではなく、むしろ私たちが排出するモノに着目する。そこから社会を捉える「ごみ社会（rubbish society）」という視点を提案している。以上が本書の概要である。

これまで日本の環境社会学では、ごみを「問題」として論じる傾向があり、リサイクル社会・循環型社会実現のための研究や、ごみの分別や減量を促進するための研究などが進められてきたように見える（鵜飼 2000; 篠木 2017など）。これらの研究は大変有益で現代社会に必要な研究である。ただしそこには、「ごみは排除するべきである」という暗黙の前提が存在し、その前提は深く問われることなく議論が進められてきたのではないか。こうしたなかで、ごみが社会・経済・産業をけん引する側面を示した本書は、私たちがいかにごみの一側面だけを捉えてきたかを痛感させる。もちろんそれは「問題としてのごみ」の側面を否定しているわけではなく、ごみには多様な側面があることを示している。

筆者はこれまで「ごみとは何か」という問いに関心を持ち、ごみを「問題」以外の視点から論じることに注力してきた。従って本書は筆者の関心と親和性が高く、示唆的な作品であった。ただしオブライエンの議論は「ごみ自体の変化」に無頓着になりすぎているようにみえる。確かに、戦前と戦後の暮らしを比較すると、生活環境やごみの制度が変化しているのであって、ごみに対する根本的な認識や理解が変更したわけではないのかもしれない。ただしこの間に「ごみの質」が大きく変化していることは注目すべきであろう。すなわちプラスチックに代表される石油化学製品の登場である。ここでごみと人間の関係は大きく変化しているようにみえる。例えば東京都では、プラスチックごみの登場により1973年からごみの分別収集を余儀なくされている（東京都清掃局総務部総務課編 2000）。このような「ごみそのもの」の変化が、ごみと人間あるいはごみと社会の関係に影響を与えた側面は否定できない。以上の点を踏まえた際、オブライエンの議論はどのように展開しうるだろうか。

ごみは人間に様々な問題をもたらすやっかいな存在である。確かに排除が必要な存在であろう。だからこそ私たちは、ごみの多様な側面を知るべきである。ごみとはどのような存在か、社会においてどのような意味を持つのかという点に、もっと関心を持つべきではないだろうか。

参照文献

[1] Gregson, Nicky, Alan Metcalfe and Louise Crewe, 2007, “Identity, Mobility, and the Throwaway Society,” *Environment and Planning D: Society and Space*, 25: 682-700.

[2] Appadurai, Arjun,1986, “Introduction: Commodities and the Politics of Value,” Appadurai, Arjun ed., *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, Cambridge: Cambridge University Press, 3-63.

[3] 鵜飼照喜，2000,「廃棄物問題と環境社会学の課題」『環境社会学研究』6: 126-132.

[4] 篠木幹子，2017,「ごみの分別行動と減量行動に影響を与える要因の検討――仙台市民の 10 年間の変化」『廃棄物資源循環学会論文誌』28: 58-67.

[5] 東京都清掃局総務部総務課編，2000,『東京都清掃事業百年史』東京都環境整備公社.